



柏葉



学校だより 第36号
 令和6年2月 2日(金)
 福島県白河市立東北中学校
 発行責任者 校長 渡邊泰昌
 「自分の未来を切り拓け！」

中山義秀記念作文コンクール 今井暖稀さん最優秀賞

僕の祖父は、温厚で優しい人だった。天気の良い日には毎日犬の散歩に行くようなとてもパワフルな人でもあった。しかし、祖父は人との会話をあまり好まなかった。また、人前であまり笑わなかった。そんなわけで、僕は祖父と会話したことがなかった。小学生の頃に、話してみようと散歩について行ったことがあったが、共通の話題もなく、結局、話すことができなかった。だから正直に言ってそんな祖父のことが僕は好きではなかった。

僕が小学生だったある日のこと、母の仕事の帰りが遅い日があった。その時、祖父が僕にパンを持ってきてくれた。いつも部屋にこもってテレビを見ていたような祖父が僕のためにパンを持ってきてくれたのだ。とてもうれしかったことを覚えている。僕が喜んでいるのを見て祖父もうれしかったのだろう、その日から母が仕事で遅くなる日はいつもパンを持ってきてくれるようになった。祖父が持つてきてくれるパンは祖父の優しさで温かさが加わり、とてもおいしかった。

それから二年たち、祖父は認知症になった。耳も遠くなった。それでも僕にパンを届けることを忘れることはなかった。だが、賞味期限が切れているパンばかり。「いらない。」といっても耳の遠い祖父には何も伝わらない。とうとう僕はしびれを切らした。大きな声で「いらないって言うてるだろう。しつこいよ。」といい、祖父にパンを投げつけてしまった。祖父は何も言わずパンを拾い机においた。謝りもしない祖父に僕はさらに腹が立ち、その日から祖父とは全く話さなくなった。

去年の春、祖父は亡くなった。がんを発症し入院していたが治ることなく逝ってしまった。お葬式が行われ家族や親戚の人たちが深い悲しみで涙を流していたが、僕は悲しいという感情がわかなかった。

亡くなってしばらくしてから、祖父の部屋を掃除していたとき、母に、「おじいちゃんはお耳だけでなく目もあんまり見えていなかったのよ。」と聞かされた。ああ、祖父は目がよく見えないなかで、僕のために毎日パンを持ってきてくれていたのだ。賞味期限の数字なんて見えていなかっただろう。いつもいつも僕の部屋にパンを運んでくれた祖父の姿を思い出し、涙が止まらなかった。

あれから一年がたち、先日祖父の一周忌を終えた。どんなに時間がたっても祖父がくれたパンの味と温かさは忘れることができない。そして、僕が冷たい態度をとってしまったことも心の痛みとともに忘れることができる。今、祖父は天国で何をしているのだろう。笑顔になれているだろうか。僕のことを見ていてくれるだろうか。今度は僕が家族に優しくしたい。伝えることができなかったこの言葉「おじいちゃん、ありがとう。今度は僕が誰かに温かさを届けるからね。」

今井 暖稀

今井暖稀さんは、市内の小中学校から4028点の応募から、選ばれました。おめでとうございます。その他の生徒も自分の気持ちを綴った素晴らしい作品を応募し、入賞しています。

優秀賞：平久江 真菜さん(3年) 兼子 心優さん(1年)
 佳作：池澤 未羽さん(3年)、柳沼 香里奈さん(3年)

